踏まれても踏まれても生き返る

いたばし雑草通信（ざっそう つうしん）

NO.10　2024.7.8

編集：発行　木村松夫
090-8646-9757
matsuokimura@gmail.com

メール発信のみの情報紙です。無料購読希望の方はメールでお申込みください。鮮明画像の PDF でお送りします。

除伐対象ヨウシュヤマゴボウ（ヤマゴボウ科）だって、こんなにきれいな花

背丈２ｍ以上になる大型野草。やたらに太い茎は小さな鎌では刃が立たず、抜き取りにも手間がかかり生物多様性エリアではご遠慮対象。食用のごぼう（牛蒡）とはぜんぜん違う種で毒性もあるので要注意植物です。けれども、花穂の先端から咲いた花が次々と実になっていく様の美しさは認めたいもの。

エンジュ（マメ科）の花の咲き始め　結構、芸術的なり

大きな道路では街路樹としてよく見かけられる落葉高木です。マメ科の仲間なので花は藤のように房状になるのですが、普段は頭上はるか上に咲いているのできちんと見たことはありませんでした。

たまたま目線の高さで見つけた花。咲き始めのようで、先端からひとつずつ咲いていくのは穂状・房状に花を付ける植物の咲き方と同じ。

面白いのは花の形です。上の花びらは大きく広がり、下の花びらは小さめ。ちょうど蝶が羽を広げたところに似ているので「蝶形花」と言ってマメ科の特徴のようです。花びらの間から突き出ているのが雄蕊と雌蕊のようです。

これまた芸術的だと感動！

草原を好む子どもたち　好まないのは大人たちと公園の管理者

５歳になった孫と久しぶりに散歩に出かけました。ママが用事でついて来ないので、おじいちゃんは「今だ！」とばかりに「ひと（他人）がいるところではだめだよ」と釘をさしながら、シロツメクサの原っぱで服がびしょびしょになるまで「本気」の水鉄砲合戦。途中、蝶々を見つけた孫くんは灌木と背丈の高い草が生い茂る急な斜面に入り込みました。子どもたちはよく通るのでしょう、けもの道が出来ていて、孫くんも平気で斜面に突入！枝先が指にひっかかって、ちょっとだけ痛い目にあいましたが、全然へいちゃら。

70年前の子どものころ、虚弱体質で日射病が持病だったわたしでも、いちばん楽しい遊び場が草むらでした。でも、現代では、ママがいると、この原っぱ遊びはちょろちょろの水鉄砲までが限界。草むらには入らないでしょう。やれ「虫に刺される」、やれ「木の枝でけがをするから・・・」と。

子どもの目線から見ると草原は興味満々のジャングル　現代の都会ではこれが奪われている

左は別の場所の原っぱ。上の状態はしばらく草刈りが行われていません。小さい子どもになった気分で、腰を下ろして目線を50ｃｍぐらいに下げてみると、シマスズメノヒエやヘラオオバコが背丈と同じ高さで覆っていて、まるでジャングルのようです。

ここに生えている植物はその他にシロツメクサ、シバクサ、カタバミ、ネジバナ、コヒルガオ、ワルナスビなど18種。それらのうち公園整備時に植栽されたり蒔種されたのは数種でしかなく、子どもたちに「悪さ」をする要管理植物はワルナスビだけ。ほとんどが自生してきた植物で、それらすべてがお互いに依存しあって「自然」を形成しているのですが、いざ草刈りが行われれば、下の写真のように味も素っ気も潤いも何もない、ただの乾いた地面。

「公園には植栽した植物以外は生かしてはならない」という管理法のおかしさを公園管理者はそろそろ気づくべきだし、花壇の花しか認めないまちの人は「雑草＝悪者」という考えを変えないと、いつまでたっても都会の地面はパサパサのままです